

巻頭言

保育の国際比較から見えてきたこと

星 三和子

フランスの保育とかわかってからもう十五年以上になります。

一九八九年のこと、私はフランス国立教育研究所の保育研究グループで四か月間修業することができました。ある公立保育園での実践研究に参加し、週に一度、研究員三人と一緒に、バスで十分ほどの園に通いました。フランスの保育園は三歳までです。子どもたちの観察のあと、お昼寝の時間に研修会が開かれます。園長、保育者、研究員はもとより、調理師、掃除洗濯係も皆一同に会します。その年のテーマはクラス間の仕切りの開放とふり・ごっこ遊び。もちろん日ごろの問題も出し合います。誰かが意見を出すと、「私はそうは思わない」と別の人が間髪を入れず反論し、全員がまったく対等に火花を散らして議論することにはびっくりしました。当時私知っていた日本の保育園では、園長や研究者の意見を職員が拝聴するという雰囲気だったからです。

「私たちも最初はそうだったの。だから対等に話ができる関係になるまで、誰の意見もじつと聞くようにしたのよ。お互いに必ず信頼し合えると信じてね。保育で大事なものは、園長や研究者の意見を職員が拝聴するという雰囲気だったからです。」

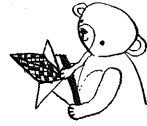


子どもと大人、子どもと子ども、大人と大人の相互関係が生きていること。でも実際は、本当に対等に話ができるまで十年かかったわ」と研究員の一人は言いました。私はこの信頼ということの深さに打たれました。私たち日本人は「そうそう、そうね」と適当なところで妥協しがちです。ところが、彼らは相手に同意しなければ、あくまで意見を出し自分をさらす、その中から信頼関係ができると考えているのです。

この時以来、日本とフランスの乳児保育について、私はこの研究員たちとの共同研究を続けています。

私たちが比較しているのは〇歳児保育でのおむつがえ、食事、睡眠、遊びのようなく日常の活動の一つひとつです。ビデオを一緒に見ながら話し合っていると、日本では当然なのに、フランス側から見れば摩訶不思議ということが次から次へと出てきました。たとえば、食べ物を食べるときに日本の保育者が「アーン」と口を開けるシーンに、「なぜなの？ なぜ子どもに大人のまねをさせようとするの？ 子どもの主体性はどうなの？ 子どもは食べなくなったら口を開けるんじゃないかしら」。また保育者の表情を見て、「保育者はどうしていつもほほ笑んでいるの？ どうして子どもが相手だとほほ笑むの？ でも素敵ね、この笑顔。フランスの保育者の仏頂面よりいいわね」。

私から見てフランスの保育で不思議なことたくさんあります。どうしてフランスの保育者は寝かせるときに寝かしつけをしないのか、どうして家から何も持ってこなくてよいと言いながらおしゃぶりとぬいぐるみは持ってこさせるのか、どうして大人のこ



ばで話しかけるのか。一つひとつの疑問に、フランスの共同研究者たちは小手先の答えでは満足しません。社会背景を調べ、歴史は中世にまでさかのぼります。そうやって互いに、自分の国の保育活動の奥にある考えや価値観を探っています。目下の課題は、フランスの保育者はなぜ〇歳児と遊ばないのか、日本の保育者はなぜ遊ぶのか。これはなかなか難問です。日本人は昔から子どもと遊んでいたように思うし…。

それぞれの〇歳児保育のビデオを相手の国の保育者たちに見てもらいました。フランスのビデオの中で、赤ちゃんがいつまでも同じおもちゃをなめていても保育者は手を出さないシーンがありました。日本のある保育者はこれを見て、「私なら別のおもちゃも与えて発達を促すと思う」と言いました。「フランスの保育者が『それは、子どもが自分で選んだおもちゃで満足いくまで遊ぶ時間を与えたいから。それはこの子に充実感をもたらし、自分で自分を発達させる力を養う』と言った」と私は話しました。保育者は「なるほど、そういう考えがあるのですね、発達にもいろいろな面があるし、発達を促すやり方一つじゃないんですね」と納得されました。

そういえば、「発達」を意味する *epanouir* というフランス語があります。エパニユールという美しい音をもつこの語は「花が開く」という意味ですが、「十分にかつ調和がとれて発達する」という意味もあります。また「喜びに満ち満ちて顔が輝いている」状態のことも言います。子どもは内側の喜び、充実感でいっぱいになり、満を持してつぼみが一瞬と開くように身体が動き発達する、というイメージです。上から肥料



をやって促成栽培で花の形には咲いても、本当は開いていないのです。

私はここにも、人間への強い信頼が底に流れていると思います。共同研究者の一人は言います。「どんなに小さい子どもでも意思を内にもつていて、それを必ず行動に表していると思うの。たとえじっと動かずに何かを見ていたときでも。小さい子どもでも無意味なことをしていることはない。子どもを理解するということは、その意味や意味を探し当てることよ」。

このように国際比較をする中で、日本の保育でごく当たり前にされていることを改めてまな板の上ののせてみると、「へえ、そういう意味があるの、なるほど」「それって絶対じゃないんじゃない？」と思うことがたくさんあり、保育の奥の深さを再認識します。子どもを育てるといことが、人類始まって以来の壮大な経験の蓄積の上にあるのだということに改めて感じます。世界を見れば保育の形はとても多様です。そして、それぞれの文化の中で、それぞれの社会に生きる子どもに、それぞれの価値観や生活習慣が伝えられているのです。今日の日本の幼稚園や保育園の保育者たちの実践は、百三十年間の日本の保育の先人たちの知恵と努力と愛情の蓄積の上にあります。多くの人たちが先人の努力の賜物を受け継ぎ、それをさらに改良してきました。おむつがえの所作一つとっても、保育の歴史の流れの中のひとこまなのです。

最近の保育行政の動向は、このことを忘れてるように思えてなりません。

(十文字学園女子大学)